

2018年(平成30年)3月18日 日曜日

新 神 戸 新 聞

「働き方改革」で過労死はなくなるか  
労働現場の取材から

# 今週のイチオシ

あなたは何のために働くのか？ 生活のため、家族を養うため、社会への貢献…。著者は明快に語る。「一番は自分と家族のため」だと。

暮らしや人生を豊かにするはずの労働が、人間性を蝕んでいく。長時間労働、パワーハラスメント、いじめ・嫌がらせ…。新聞記者である著者は長年、労働現場取材する中で、痛切なケースに数多く接してきた。本書では過労死で家族を亡くした人たちに寄り添いながら、人間重視の「働き方改革」への道筋を考える。

月100時間を超す残業に追われた道路施工管理会社の30代男性。「やってもやってもこなさきれない」というメール。「本当にごめんささい」。母への遺書の文字は震えていた。20歳の製菓会社社員は、入社2年で青春の輝く日々をなぜ絶ったのか。「長時間労働

## 日本の「労働観」を見直す

働とともに執拗なパワーハラがあった」と母は訴える。

日本の雇用構造は変容した。非正規雇用が労働者全体の4割弱に達する一方、正社員は一向に時短が進まない。そうした中、著者は安倍政権の「働き方改革」で打ち出された「高度プロフェッショナル制度（高プロ）」に警鐘を鳴らす。「柔軟で多様な働き方」とは聞こえがよいが「休日・休憩なしでいくら働いても賃金は変わらない」「働かせ放題」になってしまう。

約30年前に施行された労働者派遣法に高プロの将来を見る。当初、ソフトウェア開発など専門性の高い業種に限定されていたが、次第に拡大。とりわけ製造業で非正規が増え、2008年のリーマンショック時、雇用の底が抜けるような大量解雇という事態を招いたことが思い出される。

ディーセント・ワーク（生きがいのある人間らしい仕事）を重くみる著者は「日本の労働者の『労働観』こそ変える必要がある」と説く。公正な人事と処遇、能力を引き出す自由な雰囲気は備わってこそ真の優良企業として生産性が高まる。「そういう企業が評価される社会でありたい」。時宜にかなった1冊だ。

評者 加藤正文・論説委員  
(アトリエエム・756円)

中部 剛著

